



Title	＜研究ノート＞メトニミとメタファ：写像と類似性の観点から
Author(s)	杉本, 孝司
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2006, 30, p. 99-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メトニミとメタファ： 写像と類似性の観点から ―研究ノート―

杉 本 孝 司

この研究ノートは、杉本（2004, 2005）の延長線上にあり、最終的に杉本（2006a）で総括を予定している企てのための部分的考察である。その意図は認知メカニズムとしてのメタファ及びメトニミを「類似性」の観点から統合化しようとする企ての一段階として、メトニミを写像と類似性の観点から考察しなす場合の一つの方向性に関して若干の提案をする所にある。（同様の趣旨から「不変性仮説」を類似性の観点から考察しなす試みとして杉本（2006b）を予定している。）あくまでも方向性に関しての研究ノートであり、この方向でいけるのではないかという現段階での試案であり、更に多くのことを考慮した場合にメトニミとメタファの統合化が本当に可能かどうかは筆者自身も明確な結論を得ていない。

筆者がこれら二つの認知メカニズムに関してその共通性を見いだしている点は2点ある。一つは、写像の観点から、今一つは類似性の観点からである。以下ではこれらについて簡単に述べることにする。

先ず写像の観点から述べる。周知のごとく、Lakoff and Johnson (1980) 以来、メタファとメトニミの違いは、前者は異なる概念領域間の写像、後者は同一概念領域間の写像、とすることで区別されてきた。同時に、前者は理解機能に、後者は指示機能に、より密接に関連する認知メカニズムとしても位置づけされている。しかしもし Croft (2003) のいうようにメトニミは概念領域のハイライト、メタファは概念領域間の写像、という考え方が妥当性の高

いものであるなら、その根本部分においてメタファとメトニミを写像、概念領域いずれの点に関しても区別する必要は必ずしもない。(より正確には、メトニミは概念ハイライトの「一事例」ということになるが、本研究ノートの趣旨に抵触しないので今は触れない (Croft (2003), pp187ff 参照).) なぜなら、Croft の概念領域ハイライトとは、ある概念を起点とする別概念の活性化のことであり、メトニミの場合は同一概念領域内の下位概念が活性化されるということであるからである。つまり「ハイライト」という用語が使われているが、ある概念を起点とする別概念の活性化とは概念写像の定義そのものであり、何らかの談話機能の違いはあるとしても、その根本においては「概念間の写像」の図式はメトニミでも成立していると考えられるからである。もちろん更に話を進めてメンタルスペース理論 (Fauconnier (1997), Fauconnier and Turner (2002)) の観点に立てば、メトニミであろうがメタファであろうが、概念レベルでの写像があって初めて成立する認知メカニズムであると考えられることは明らかであろう。

次に類似性の観点からメトニミとメタファの共通性を探ってみる。近年のメタファ理論の発展の経緯を辿れば、Grady (1997) の primary metaphors の考えは何らかの意味ですべてのメタファ理論が考慮すべきものとなっている (cf. Lakoff and Johnson (1999)). 筆者もその考えには同調している。しかし類似性の観点からメタファ理論を再構築しようとした場合 (これが杉本 (2005a) の中心課題となる) primary metaphors は克服し難い障壁となるように思える。どちらかと言えば、純粹に correlation に基づくとされる primary metaphors は、メタファ的というよりもメトニミ的色彩が強いものであるからである。もちろん、メタファには「一方向性」「非対称性」といった根強い特徴もあるが、Grady が resemblance metaphors として分類しているメタファの下位区分には「一方向性」「非対称性」といったことが成立しないメタファの存在が取り上げられ支持されている。従って、今の所、メタファの特徴としての「一方向性」や「非対称性」は必ずしも信頼できるものとは言えないのではないかと思う。しかしその Grady でさえ、primary metaphors は常に一方向性を保つと

考えている。つまり Lakoff and Johnson (1980) 以来提示されてきた数多くのメタファに関する特徴を説明できるいわば「メタファ中のメタファ」として primary metaphors は位置づけられていると言えよう。しかしこの、類似性から完全に切り離され二つの概念に共通性がないものを correlation のメカニズムを用いて特徴付けようとされる primary metaphors に関しては、実は、それが故に、メトニミがその根本にあると考えるべきではないかという立場を容認する下地を用意することにもなっている。なぜなら、大雑把な言い方ではあるが、Lakoff and Johnson (1980) でもそうであったように、もともとメトニミによって関連付けられる二つの概念の関係は、類似性によってではなく、指示対象の転移の観点から捉えられることが普通であったからである。すなわち、関連付けられる概念間に類似することは何もないが、両者は同一概念領域間での「隣接性」などに基づいて写像される、とされるのが一般的なメトニミの捉え方だからである。このような観点から Grady の primary metaphors を見る時、確かに次のようなメタファにおいて、

MORE IS UP / LESS IS DOWN

HAPPY IS UP / SAD IS DOWN

IMPORTANT IS BIG / UNIMPORTANT IS SMALL

これら primary metaphors で結び付けられる概念は同一経験領域におけるメトニミ的結び付きである、とする考え方にもそれなりの妥当性があると言えよう。メトニミとメタファに連続性を認める Radden (2003, 411) などは、その証拠として、MORE FOR UP のメトニミ用法が次のガソリンスタンドでの店員と客のやりとりの客の返事に見られるとまで主張する。

Attendant : *Shall I fill her up?*

Driver : *Yes, put in as much as she can take.*

筆者はこのデータの解釈に関しては Radden とは異なる。この場合、客は店員の発話文を MORE IS UP から理解し、その返答においては単に量に関する発言をしているのであり、店員の発話文の up に呼応して UP 概念を指示しようとして述べた文ではないと解釈するほうがまともであろう。従って Radden

の主張とは異なり、この例は MORE FOR UP のメトニミ用法を示しているとは言えないと思う。しかし、この Radden の極端な例は別としても、primary metaphors に関与する二つの概念がメトニミによる説明を受ける下地は常に存在していると言える。

では primary metaphors はメトニミではなくメタファであると言えることにはどれほどの根拠があるだろうか。この点に関しては Grady が多くのページ数を割いているのでそちらを参照して頂くのがよいが、筆者の最終的目標であるメタファ及びメトニミを類似性の観点から統合化しようとする企ての観点からはどのようなことが考えられるかということに触れたい。筆者は、Grady 同様、メタファには類似性をもって説明するほうがよいと考えられるものも多くあると考える。従って、メタファの本質的な部分にはこの類似性の捕捉ということがあると考えたい。この点は Takamori (2004) でもある程度資料レベルでの検証が試みられている。では、一見、類似性とは無縁の primary metaphors はどのように考えればよいのだろうか。先に見た Radden などはこれを純粋にメトニミだと主張している。Grady 本人は subscenes という考え方を持ち出し、二つの subscenes が correlate することにより primary metaphor は生まれる、としている。もちろん、ここで問題になるのは、では “correlate” とは何なのか、ということであろう。Grady (op.cit., 24) では “conceptual binding” という考え方を提案し、次のような説明を与えている（ここでいう “primary scene” とは correlate された二つの “subscenes” からなる scene のこと）。

Since we experience primary scenes very frequently, and since they involve tight correlations between distinct aspects of phenomenological experience, it should not be surprising if these distinct dimensions become closely associated in our cognitive representations of the world as well. In fact it would be surprising if it did not. Warmth and emotional intimacy, heaviness and strain, itching and compulsion to act --- these are dimensions of experience which are likely, ..., to be strongly associated in our minds, even below the level of conscious analysis. This is the sense in which I will refer to *binding* between concepts.

としている。しかし、要するにこれは"associations"と位置づけているのであり、その限りにおいて、単純なメトニミで持ち出される考え方と大差ないものである。従ってメトニミの観点からこの現象を観る Radden (op. cit., 413-414) では、

The notion of correlation as used in the empirical sciences involves an inter-relationship between two variables in which changes in one variable are accompanied by changes in the other variables. Statistically, the degree of a correlation is expressed as a coefficient based on scores along the scales of the two variables. Correlation coefficients allow the researcher to make predictions, but they do not imply a causal relationship between the two variables. ... In order to correlate two variables, they have to be conceptually contiguous.

としてまさに correlation とはメトニミそのものであると言わんばかりである。しかし筆者には primary metaphors をメタファから位置づける Grady の立場にしろ、メトニミから位置づけようとする Radden のような立場にしろ、いずれにおいても、類似性の観点からは見落としていると思われる重要な要因があるように思える。それはどちらの考え方を取るにしても、correlate する概念が生じる環境は時間／空間において同一の広がりがあるものとして認識される必要があるということである。Grady の言う“binding”とはまさにこのような同一時空間の制約を受けていることであり Radden の言う“conceptually contiguous”も同様の事態を述べたものであると考える。従って、この時間／空間の「同一性」を支える概念レベルでの認識こそが異なる概念間の correlation を可能にするのだと考えられる（もちろん実際にはこれ以外にも必要な要因が複数あると考えられるが今は触れない）。そのように考えると、correlation に基づく primary metaphors (及びそれを基盤とするすべての complex metaphors) と類似性に基づくメタファ (Grady の用語を使えば resemblance metaphors) を一つの観点から統合化する道が開けてくるように思える。確かに「同一性」と「類似性」は異なる概念であるが、「写像により結びつけられる両者の概念に共通するもの」という観点からは、primary metaphors の場合は「同一時空

性」、resemblance metaphors の場合は「類似性」という要因を抽出することができる。つまり荒削りであることは現段階では否めないが、写像により関連付けられる二つの概念と両者を結びつける要因、というスキーマ的情報の観点からはこの二種類のメタファは同種類のものではないかという可能性が見えてくることになる。杉本（2004）で考察した類似性と共通スペースの問題は、このような図式を具現化するための一つの方策としてのメンタルスペース理論の位置づけを意図して書かれたものである。

さて今仮に、correlation のようなものが同一性／類似性の観点から捕捉できるものであるとして、残るは、いわゆるメトニミをではどのように特徴付けできるのかという問題である。もし correlation の問題を克服できるのであれば、メトニミの問題は比較的用意に解決できるのではないかと考えられる。つまり初めにも触れたが、もし Croft (2003) の概念領域ハイライトの考え方が支持できるものであるとした場合、メトニミとは同一概念領域内の下位概念が活性化されることをいうことになるからである。つまり、ある概念を起点とする別概念の活性化が、「同一」領域という制約のもとに行われるわけであり、ここでも「同一性」という概念が深く関与していることが見て取れるからである。換言すれば、メトニミもメタファ（正確には primary metaphors）と同じように概念レベルでの「写像」と「同一性」が深く関わることにより成り立っていると考えられるからである。

以上より、メタファ、メトニミを通して「写像により関連付けられる二つの概念と両者を結びつける要因」というスキーマ的理解が可能であることを見たことになる。その「結びつける要因」に概念レベルでの同一性／類似性があるわけで、現在の見込みではこの二つの概念は、少なくともメタファ／メトニミという図式においては更に一般化することが可能なのではないかと考えている。更にメトニミにおける隣接性、メタファにおける類似性の間にも重要な概念リンクがあると思われる (cf. SIMILARITY IS PROXIMITY (Grady (1977), 183)) が、これらも含めて、杉本 (2006a) で論を進めることができればと考えている。

参考文献

- Croft, William (2003) "The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies."
In Dirven, René, and Ralf Pörings (eds.) (2003), 161-206.
- Dirven, René, and Ralf Pörings (eds.) (2003) *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in Thought and Language*. N.Y. : Cambridge University Press.
- _____, and Mark Turner (2002) *The Way We Think*. N.Y. : Basic Books.
- Grady, Joseph E. (1997) *Foundations of Meaning : Primary Metaphors and Primary Scenes*. The University of California Ph.D. Dissertation. Available from UMI Dissertation Services.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *PHILOSOPHY IN THE FLESH : The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. N.Y. : Basic Books.
- Radden, Günter (2002) "How metonymic are metaphors?" In Dirven, René, and Ralf Pörings (eds.) (2003), 407-434.
- Takamori, Rie (2005) *Driving Forces for Metaphorical Mapping*. Master's thesis : Osaka University of Foreign Studies.
- 杉本孝司 (2004) 「類似性と共通スペース：メタファ理論とスペース融合モデルの観点から」(研究ノート) (2004年3月31日刊) 『英米研究』第28号, pp.195-202. 大阪外国語大学英米学会.
- _____(2005) 「メタファと意味解釈」(2005年9月18日) 日本認知言語学会第6回大会シンポジウム口頭発表『認知意味論の展開ーメタファを中心にー』(於お茶の水女子大学) (同大会 Conference Handbook, pp.267-270)
- _____(2006a) (to appear) 「メタファ理論」『日本認知言語学会論文集』第6巻 (2006年9月刊予定)
- _____(2006b) (in preparation) 「不変性原理と類似性」